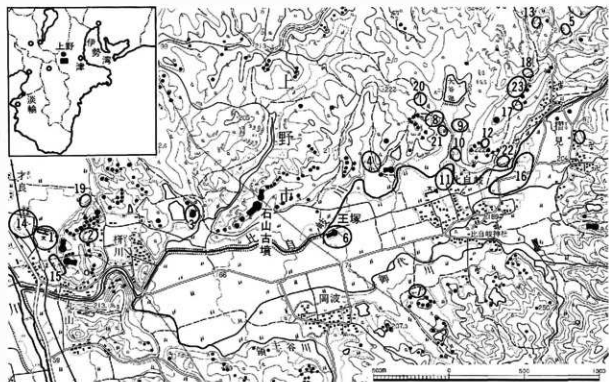


上野市岡波 王塚古墳



包蔵地 1～5(弥生) 6～13(古墳) 14～18(飛鳥～平安) 19～23(鎌倉～室町)

図1 王塚古墳位置図(国土地理院 1:25000 伊勢路)

1979・3

三重県教育委員会

I 前 言

王塚古墳（以下「王塚」と記す）は比自岐盆地の中央やや北寄りの水田中に位置し、行政的には上野市岡波字深内557番地に属する。この王塚（県遺跡番号3140）はもちろん、その周辺も王塚遺跡（県遺跡番号8075）として登録されている周知の遺跡である。現況は王塚の墳丘残存部が草生地であり、既削平部分は遺物包蔵地と同様に水田と畑である。

当該地域は、昭和53年度県営園場整備事業上野南部地区の対象地となったため、この取扱いについて県農林水産部および上野耕地事務所と協議した。その結果、王塚の現存墳丘部を保存するための部分的な設計変更を行い、道路敷と削平予定地内に含まれる濠および既削平墳丘推定部分に対しては、規模確認を目的とする立合い調査を実施することとなった。

これにより、5月23日に残存墳丘部を中心として4方に試掘溝を設定した。さらに、12月18日にも西北部に3本の試掘溝（1～3T）を設けた。しかし、この日は諸種の制約により、重機による表土削平後、レベルを用いないので断面略測に止まった。また、7月12・15日には三重大学歴史研究会原始古代史部会による墳丘測量も実施された。当報告の墳丘実測図（図4中）は、この研究会の測量図の提供によりなるものである事を明記したい。

調査に際しては、三重大学歴史研究会原始古代史部会をはじめ、地元土地改良区、上野耕地事務所、工事請負会社等の協力を得た。記して謝したい。

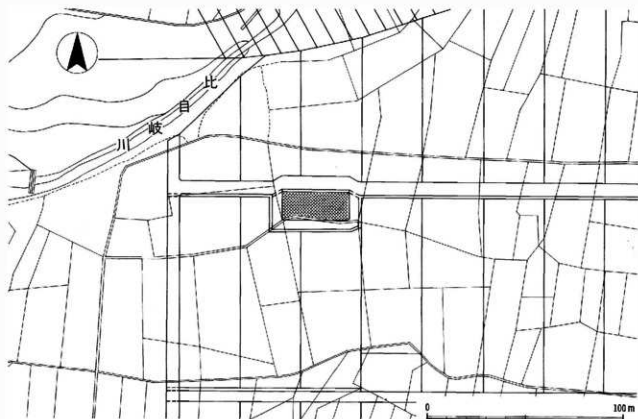


図2 王塚古墳平面図（1：2000） 網目＝墳丘残存部

II 位 置

四辺の山地に源を発する木津(旧長田)、服部、柘植の3川は、南山城で名張盆地の水を合し、やがて淀川として大阪湾に注いでいる。この3川の潤す上野盆地は、放射状裂罅に沿って旧氾濫原が形成されたため複雑な出入りがある。比自岐の小盆地もこのひとつであり、大山田や柘植、友生、阿保等も同類である。比自岐盆地は、南北の山際にそれぞれ御代川と比自岐川が西流し、この小盆地を出て木津川に合流している。

弥生時代以前の比自岐の歴史は不明な点が多いが、わずかな遺物包蔵地(2~5)が確認されており、比自岐盆地の西隣では弥生後期の土器を出土した才良遺跡(1)も知られている。

古墳時代には、馬場西遺跡(7)等の集落跡とともに、王塚や120mを測る前期の石山古墳をはじめとする6~7基の前方後円墳と100基以上の円墳等が築造された。比自岐の前方後円墳は北側丘陵上に4基、東側丘陵上に1~2基が分布し、王塚のみが盆地中央北寄りの平地に立地する。これらの古墳の分布状況とその地理的な完結性を考え合わせれば、比自岐盆地に一定の社会単位を想定可能である。これを今「グループ」と仮に呼んでおこう。

同様な観点から伊賀の前方後円墳の分布を見ると、「古墳群」を包括したグループがいくつか認められる。すなわち、比自岐グループの西隣の丸山に2基分布するが、上林の1基も含めて仮に丸山グループ(3基)と呼ぼう。これより南方の美旗古墳群は比土が基盤と考えられている。比土東方の1基も立地こそ美旗と離れているが、比土を基盤とした点では同一のものであり、同族の傍系であろうか。これらを合せて比土グループ(6基)と仮称しよう。伊賀の西南端には鹿高神社1号墳と宮山古墳がある。黒田川の両岸に及ぶが、ともに前方形にも横穴式石室を持つ。これを一括して黒田川グループ(2基)と仮称しよう。以上が南伊賀であるが、次に北伊賀に目を転じよう。佐那具付近には御墓山古墳や外山古墳群、キラ土古墳と集中的に存在する。これを仮に佐那具グループ(6基)としよう。また、大山田の小盆地にも水分古墳や鳴塚が知られているが、荒木車塚も含めて大山田グループ(3基)としておこう。このほかに、阿山町川合に陽夫多宮山3号墳が存在する。1基だけだが御旅所古墳の近くでもあり、川合グループとしておこう。また、上野盆地西北にはチヨロ塚が知られており、一応岩倉グループ(1基)としておこう。

次に前方後円墳の規模を時代順に概観してみよう。4世紀後葉から5世紀初頭には、比自岐グループの石山古墳(120m)、比土グループの殿塚(90m)、大山田グループの荒木車塚(70m)があり、石山古墳が優性である。5世紀前葉では佐那具グループの御墓山(188m)が他を圧しており、比土グループの女郎塚(100m)がこれに続く。5世紀中葉から後半にかけては、比土グループの馬塚(142m)が他の倍以上の規模を誇っている。要するに、各期の最大の古墳は南から北に移り、また南に移行したわけである。これらの100mを超す古墳は、その規模において他を圧しており、単にその属するグループに止まらず、グループの連合体を代表するものと理解できよう。従って、伊賀地方に一定の政治的なまとまりが想定できる。しかし、その内実是不

安定なものであったらう。なぜなら、「前期後半には」「南部とは別の首長層が盆地北部（旧阿拜郡）を地盤に存在したものであろう」^⑥し、その結果として、代表権は代々移動している。要するに、前方後円墳を含んだ古墳群が、前方後円墳を含まない古墳群を従えてグループを形成していた。そして、このグループが南北でそれぞれのグループ群を成し、南北のグループ群から伊賀地方の連合体の代表を輩出していたものであろう。

しかし、5世紀後葉以降の前方後円墳はほぼ50m以下になり、突出した規模のものは見られなくなる。これは前代の政治秩序から新たな政治体制への変動を反映したものであろうか。6世紀には群集墳が各地に成立する一方、前方後円墳は6世紀後半には築造されなくなるようである。王塚もこうした動向の中で理解されるべきであらう。

やがて伊賀の古墳は、7世紀第2四半期にはその築造も終息し、律令体制の成立する7世紀第4四半期まで細々と追葬が行なわれた。

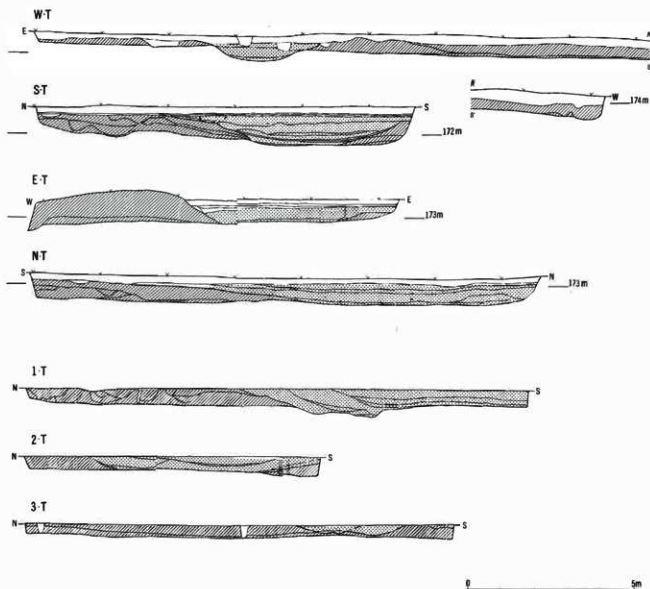


図3 試掘横断面図(1:120) 網目=濠 斜線=地山

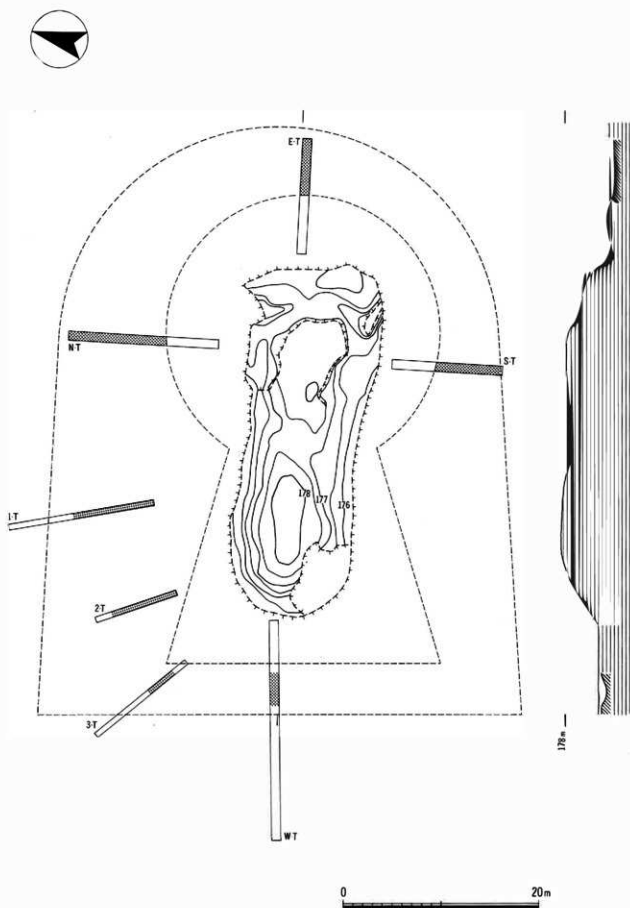


図4 墳丘実測図および推定復元図(1:400) 網目=濫確認部分

III 遺 構

墳丘は削平が著しく、残存部だけではその墳形や規模の推定は困難な現状である。そこでまず推定長軸方向とこれに直交する計4本の試掘溝を設定し、後日前方部推定部分の削平予定地内に3本の試掘溝を設けた。だが、3本の試掘溝は一段低い畑を重機が約40cm削平した後の略測であり、絶対高は求め得なかった。ともかく、7地点での断面観察(図3)を実施できた。

西試掘溝(W・T)では、畑の耕作土直下の地山を切る濠が検出できた。濠は多少の削平を想定すべきと考えられるが、幅約3.2m、深さ約60cmを測り、埋土中に遺物は見られなかった。

南試掘溝(S・T)では、2層の水田床土下で幅約6.6m、深さ約90cmの濠が検出された。埋土最上層(暗灰色砂質土)中には埴輪片と炭化物が混入し、最下層は黒灰色粘質土である。この部分では後世の削平がほとんどなかったようであり、濠の旧状を最も良く観察できた。

東試掘溝(E・T)でも、2層の水田床土下に濠を検出したが、調査の制約上外側の肩を確認できなかった。西半部には暗黄褐色砂が堆積しており、封土はこの上に置かれたのであろう。

北試掘溝(N・T)でも濠は認められたが、外側の肩は試掘溝外であり、現地形から既に削平されているものと考えられる。内側の肩も不明瞭である。埋土中には埴輪片が含まれていた。

試掘溝1(1・T)は、その位置も工事により不確定となった。レベルは図の上端で172m前後であろう。南半部に濠を検出したが、埴輪は断面には見られなかった。

試掘溝2(2・T)も削平され、レベルも不明だが、埴輪片を包含する濠を確認できた。濠の内側の肩は、試掘溝南端からあまり隔らない位置にあるものと推定される。

試掘溝3(3・T)は、削平が最も著しく、濠の底部をわずかに検出したのみである。

なお、濠以外にピット類が各地点で検出されたが、併出遺物はほとんどなく、所属時期等は不明である。いずれにせよ、王塚遺跡の遺構だが、王塚との前後関係等はほとんど不明である。

以上の調査結果のみでは、古墳の基底線も不明であり、前方後円墳か前方後方墳かも決定できない。しかし、前方部が西に向き、濠が巡る事は確認できた。調査結果と墳丘測量図を基に削平も考慮して推定復元したものが図4である。全長は48m程として大きな誤差は無かろう。N・Tでの濠の内側肩が不明瞭なため、後円部径は28mより2m程大きい可能性もある。前方部の開き具合は、2~3・TやW・Tが僅かに参考となるが、クビレ部は全くの推定である。濠の外形を決定する根拠は薄弱だが、N・Tや1・Tから楕形を呈するものであろう。また、地形が北に低いいためか、濠は南半部より北半部が広がっているようである。

IV 遺 物

僅かな古式土師器や須恵器、瓦器等の細片のほかは全て埴輪である。とはいえ、埴輪の総量は表面採集品も含めて整理箱に3杯足らずである。以下には埴輪のみを示した。

なお、埴輪の技法は川西宏幸氏の論巧^⑤に全面的に依拠した。

1. 全体的傾向

全ての埴輪に黒斑は無い。肉眼観察に過ぎないが、胎土から3群に類別される。すなわちI群は、砂粒や小石を少量含むものであり、円筒埴輪の大多数と形象埴輪の一部が相当する。II群は、胎土中に数%の有機質の炭化物を含み、類例は少ない。III群は、砂粒を多く含む特徴的なものであるが、量的には最も少ない。以下、特に記さない限り胎土はI群である。

絶対量が少ないため、出土傾向は特に指摘できないが、大多数は後円部の南北(S・TとN・T)から出土した。

2. 形象埴輪

円筒埴輪以外の埴輪として、便宜上朝顔形円筒埴輪もここに包括した。

(1~2)には赤色顔料を留める。

(3~9)は胎土がII群に属し、ハケの工具も同一らしく、同一個体の人物埴輪片と考えられる。(3)は腰、(4)はスカートの裾、(6・9)は上衣の裾付近であろうか。(3~4)には篋描の区画毎に塗り分けられた赤・白・緑色の顔料を留める。(8)にも赤色顔料が認められる。

(10・13~14)は朝顔形円筒埴輪片である。(10)は口縁部、(13~14)は頸部であり、(13)は胎土がII群に属す。

(11)は不明だが、人物の頭部の可能性もある。(12)はタガの上が疑口縁である。(15)は端部に接してタガを持つ。口縁部の可能性もあろう。類例が他に2点認められる。(16)は人物の腕であるが、手首から先は欠損している。

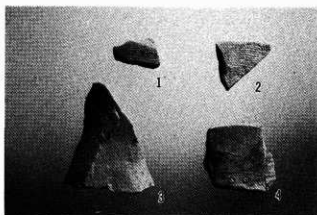


写真1 人物埴輪 (1:3)



写真2 人物埴輪 (1:3)

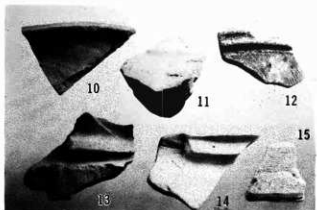


写真3 10・13~14朝顔形円筒埴輪 (1:3)

11人物埴輪 頭部? 12・15不明

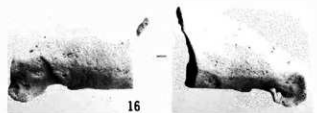


写真4 人物埴輪 腕部分 (1:3)

3. 円筒埴輪

図上でも完形に復元できる例はなく、タガの段数等も不明である。スカシは全て円形を呈す。

a類 (17~33) は、外面に二次調整を施したものであり、ほとんどがこの類に含まれる。

口縁部は、ナナメハケかヨコハケを内外面に施し、口縁端部内外をヨコナデする例 (17~22、25~26) と、内面にハケが無く口縁上端と外面をヨコナデする厚手の例 (23~24) がある。(17) は還元焰焼成された、焼け歪みのないものである。内面のハケより下には指圧痕が著しい。外面の二次調整はB種ヨコハケである。(18) は朝顔形円筒埴輪片の可能性もある。(20) は赤色顔料を塗布してあったらしい。(25) は胎土がIII群に属し、(26) はII群に属す。

(27~30) は体部片である。(27~28) の胎土はII群に属し、B種ヨコハケを持つ還元焰焼成品である。(27) のタガには布の圧痕が見られる。(29) は二次調整にナデを施す。(30) はタガの断面形が台形を呈し、胎土はII群に属す。

(31~33) は底部片である。(32~33) の胎土はII群に属す。(31~32) の内面は指圧され、外面のハケはほとんど残らず、底部は薄くなる。これらは、畿内に見られる底部調整技法である。

(33) は底部調整が行われず、底面には板の痕跡と粘土帯の接合痕を止める。

b類 (34) は、外面に二次調整を施さない例であるが、2個体分の破片があるだけである。

(34) は口径約30cmを測り、2段のタガまで図示できた。外面一次調整に用いられたハケは、a類には見られない目の荒いものである。口縁部内面にはタテナデが施され、ハケは見られない。口縁部外面には一本の弧状の寛描沈線が見られる。

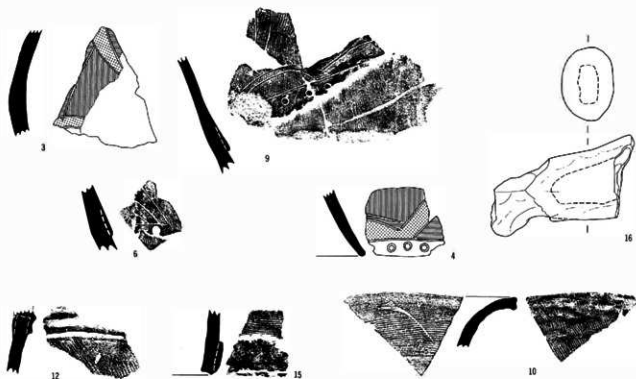


図5 埴輪実測図(1:3) 網目=緑色 縦線=白色 横線=赤色

0 10 cm

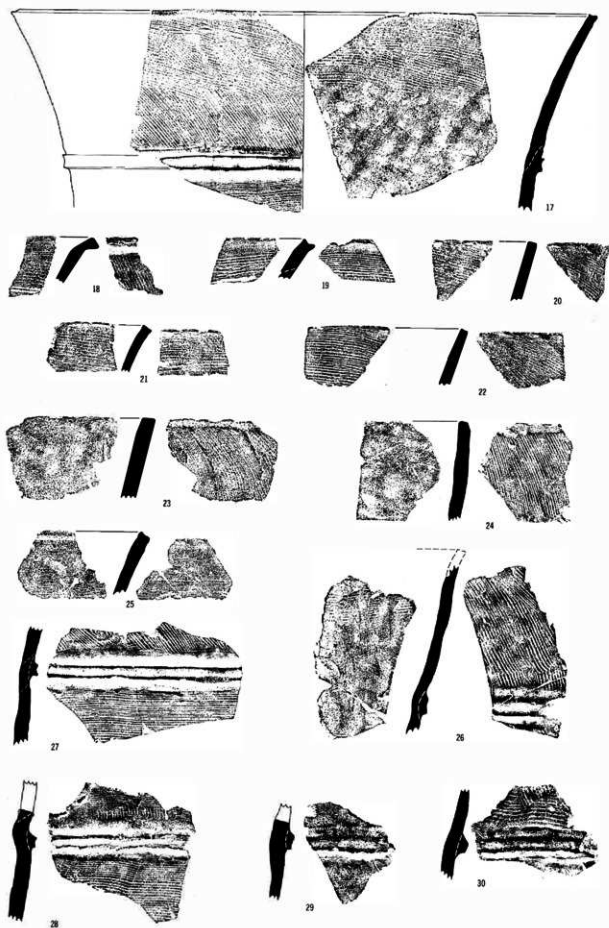


图6 埴輪実測図(1:3)

0 10cm

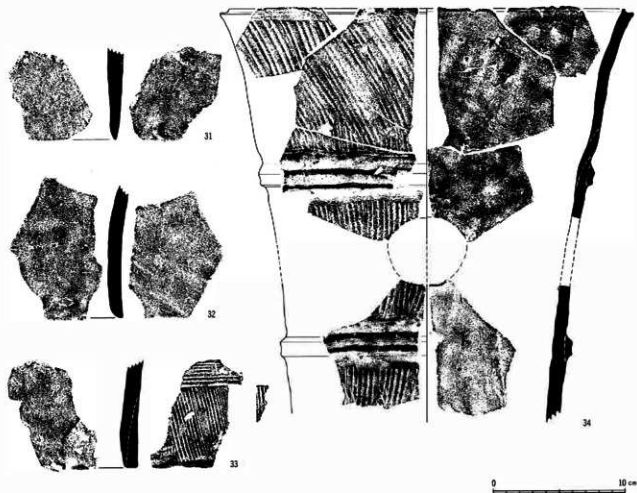


図7 塚輪実測図(1:3)

V 結 語

1. 遺 構

王塚は、従来から前方部を西に向けた前方後円墳と推定されていた。だが、今回の調査結果からは、前方部が西に向いている事はほぼ確認できたが、前方後円墳であると確定するまでには至らなかった。しかし、前方後円墳とすべき積極的根拠はなく、一般的蓋然性から前方後円墳と推定する。前方後円墳と仮定して推定復元した(図4)が、ある程度の誤差は考慮すべきである。

全長は48(±)m、後円部径は28(±)m、濠を含めた全長は60(±)mと考えられる。前方部幅は後円部径に近似すると推定される。前方部と後円部の現存墳丘高はともに4m程である。濠は楕形を呈していたと考えられるが、地形の関係から濠の北半部は南半部より広いようである。しかし、復元図のように整然とした外形を呈するものかは定かでない。

内部主体に関しては、「塚上ニテ足踏強クスレバ大鼓ノ音ニ似タル響アリ故ニ内空歟ト推考」¹⁹⁾されていたのみで、それ以上の事は不明である。後円部東半部の破壊が著しく、封土中や周辺には石材が見られない現状では、横穴式石室と断定する積極的根拠もない。

2. 埴輪

全ての埴輪に黒斑はない。胎土によって3群に分類したが、これと成形・調整技法が特に対応関係を示すものではなさそうである。出土傾向は、後円部の南北（S・TとN・T）で大多数が出土したが、後世の削平を考慮すれば、当初の埴輪の配列状況を反映したものとは即断できない。

円筒埴輪には、還元焰焼成例も含まれ、圧倒的多数に外面二次調整が行われている。スカシは全て円形で、口径は30～45cm程である。タガは3段前後であったろうか。タガの断面は低いM字形を呈する例が大部分を占め、断続ナデ技法や押圧技法は見られない。外面二次調整には、B種ヨコハケは有るが、C種は見られない。底部片は3点のみだが、内2点には畿内第V期の底部調整技法が見られる。残る1点は不調整であり、淡輪系の底部調整技法は確認されなかった。

3. 築造時期

調査結果からは、築造時期の推定資料としては、埴輪が最良であろう。王塚の埴輪は、埴輪編年の第V期に相当するが、このV期は陶色のTK23型式以降とされている。伊賀において、王塚の埴輪に最も類似する例はキラ土古墳出土のものである^⑬。この古墳からは陶色のTK47型式相当の須恵器が出土している。従って、王塚の築造時期は、6世紀初頭を中心に、5世紀後葉から6世紀前葉の幅の中で考えるべきであろう。

4. 問題点

墳形や規模を確定できず、また、内部主体等も一切不明である。しかし、園場整備事業は、計画変更によって墳丘残存部のまわりに農道を巡らし、北側以外は盛土によって濼の破壊を最小限に止め得た。従って、今回の調査結果は、今後の研究によって補われる余地が残った。

王塚出土の埴輪は、第V期に属し、黒斑がなく、還元焰焼成例も含む。そして、畿内的な底部調整技法やB種ヨコハケは有るが、淡輪系の底部調整技法やC種ヨコハケは確認されなかった。

埴輪焼成に宍窯を採用した第IV期以降の伊賀における類例としては、南伊賀では貴人塚と玉塚^⑭（共に比土グループ）、北伊賀ではキラ土（佐那具グループ）出土例がある。玉塚は馬塚の陪塚の可能性のある方墳である。貴人塚と玉塚の埴輪は、黒斑がなく、還元焰焼成例も含む。二次調整は見られるが、淡輪系の底部調整技法はないようである。これに対して、キラ土の埴輪は第V期に属し、淡輪系の底部調整技法やC種ヨコハケを持つ。また、上野盆地北中央部に位置する伊子之丸古墳出土の埴輪は、黒斑を持つためか川西氏は第III期に編年されている。しかし、淡輪系の底部調整技法を持った例もあり、還元焰焼成例も含まれているようであり、編年上の位置はともかく、実年代は第III期より新しいと考えたい。いずれにせよ、淡輪系の底部調整技法は、南伊賀には未確認であるが、北伊賀には分布する。

この特徴的な底部調整技法は、淡輪では第IV期にのみ見られ、第V期には西遠江や北伊勢、伊賀に認められるのに対して、南伊勢は畿内の様相を示すとされるが、北伊賀は淡輪や北伊勢に、南伊賀は畿内や南伊勢に共通する現象が認められるようである。

淡輪で第IV期に成立した底部調整技法は、同じ第IV期に北伊賀に飛火のように伝播した可能性

もある。しかし、伊子之丸のものには底部調整技法は有るが、同個体にも黒斑が有り、また、C種ヨコハケがなく、淡輪系の技法としては典型的とは言い難い。一方、今後北伊勢において第Ⅳ期の類別が確認される余地もあり、この技法は北伊勢から北伊賀に伝わった可能性が高からう。

上記のように、埴輪の技法上の差異をもって伊賀における地域差とするには、なお、あまりに資料不足ではある。しかし、古墳の様相から伊賀では南北ふたつの首長層が存在したとする、先に「位置」の項で引用した見解とも矛盾しないようである。畿内から南伊勢に通ずるルート上には、各期を通じて優性な比土グループと、これに近接する丸山グループや比自岐グループが存在する。これらは、対畿内関係において同様な対応を示したのであろうか。王塚の被葬者は、このような政治状況に直接関与した首長層のひとりであったであろう。彼の時代はまた、前代のように伊賀地方の連合体を代表するような百数十mの古墳は築造されなくなり、小型の前方後円墳しか築造されなくなった点に窺われる、社会秩序が再編成された時でもあっただろう。この被葬者は、比自岐グループという社会の長として利益を代表する一方、階級的支配者としての性格を内包していたものであろう。

(山田 猛)

〈注〉

- ① 福永正三『秘蔵の国』1972
- ② 宇佐晋一「三重県上野市才良遺跡概報」『古代学研究』12 1955
- ③ 山田 猛「上野市比自岐 馬場西遺跡」『昭52県園埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会 1978
- ④ 小林行雄「三重県石山古墳調査略報」『日本考古学協会第八編総会研究発表要旨』1951
- ⑤ 森 浩一、森川桜男、石部正志、田中英夫、堀田啓一「三重県わき塚古墳の調査」『古代学研究』66 1973
- ⑥ 石部正志「伊賀」『日本の考古学』Ⅳ 1966 但し、盆地北部を旧阿拝郡に限定する必要もなく、この指摘の時期に前・Ⅱ期末頃も含め得るかもしれない。
- ⑦ 伊賀における前方後円墳に関しては下記の文献を参照した。森川桜男等「伊賀」『古代学研究』30 1962
森川桜男「美旗古墳群」「春日宮山古墳」「青蓮寺開拓建設事業地域遺跡地図」三重県教育委員会 1970
三重県教育委員会「伊賀東部開発地域遺跡地図」1971 上野市『埋蔵文化財第一次調査報告』1978
上野市教育委員会・上野市遺跡調査会「上野市遺跡地図」1978
- ⑧ 川西宏幸「円筒埴輪論」『考古学雑誌』60-2・4 1978・9 論点は多岐に及ぶが、当報告に直接関係する点を略記する。まず、埴輪を第Ⅰ～Ⅴ期に編年し、例えば第Ⅳ期の淡輪地方に特徴的な技法や、第Ⅴ期の畿内に一般的な底部調整技法を明らかにした。また、外面二次調整のヨコハケをA種、B種（工具を器壁から離さず、2回以上静止させて1周する連続的なもの）、C種（工具を器壁上で静止させずに一気に1周さすもの）の3種に分類した。
- ⑨ 類別は群馬県観音山古墳出土の人物埴輪にあると聞く。
- ⑩ 玉井章道「明日香村松岡近辺の埴輪」『青陵』31 1976
- ⑪ 三重県『史蹟、名勝、天然記念物、基本調査報告』1939
- ⑫ 平安学園考古学クラブ『陶器古窯址群1』1966
- ⑬ 註⑩に同じ
- ⑭ 森川桜男「美旗古墳群」『青蓮寺開拓建設事業地域遺跡地図』三重県教育委員会 1970
- ⑮ 渡辺泰三、西嶋莞、南部彰弘、森川桜男「三重県上野市伊子之丸古墳」『古代学研究』33 1963
- ⑯ 当報告にあたっては、埴輪の問題を中心に西口寿生氏の御教示による点が極めて多い。
- ⑰ 註⑩に同じ